# 疑似体験「私の一年間」より人工・自然放射線について学ぶ

【応募者】○加藤　賢一（常葉大学大学院）
【指導教員】安藤　雅之（常葉大学大学院）

| 対象（1 つに限定） | 小学校 |
|---|---|
| 参考文献、<br>使用する実験道具等 | 電気事業連合会　環境省　日本原子力文化財団<br>大分県オフィシャルホームページ<br>とみおか放射線情報まとめサイト |
| キーワード | すごろく、人工・自然放射線、日常生活、安全 |

## 1. わたしにとっての〝放射線エウレカ〟

幌延深地層研究センターに見学に行った際に、高レベル放射性廃棄物の処理方法を検討している現状を知った。日本のどこかで処理しているぐらいの認識だったため、そこで働く人たちの熱量に驚くのと同時にまだまだ課題が山積している現状に直面した。幌延町は地層処理するための研究施設であるため、放射性廃棄物を持ち込むことも使用することもないと住民に説明してきたが、反対の声も少なくないらしい。正しい知識で正しく恐れていない状況があった。これを何とかするためには、小学生の時からの教育が必要であると考える。

## 2. 教材に込めるメッセージ

小学生はメディアの影響で放射線は怖いというイメージが先行しているのではないか。普通に生活していても、放射線を浴びる量は致死量に満たないことを知る術がない。そこで、ゲーム「私の一年間」を通して、一年に浴びる可能性がある放射線の量を疑似体験する。ここでは、「人によって放射線を浴びる量には違いがある。」「特別な生活をしない限り安全である。」という認識が持てるようにしたい。

## 3. 教材の内容

私が考える人生ゲームは、小学校低学年が対象である。予備知識がなく、放射線を恐れているだろう子どもたちの意識改革が狙いである。また、複数人でやることにする。それは、ゴールした時に友達と比べることで友達との違いに気づき、どんなに多い人でも安心であることを、対話を通して理解してほしいためだ。

ルールは、さいころを振り、出たマスまで進む。

図１　カード
特定のマスで受け取るカード

進んだ先に書いてある指示に従う。内容は主に、「飛行機に乗った」「干しシイタケを食べた」という行為から「カードをもらう」というカードを手に入れていくものである。３種類のカードがあり、緑は食品からの被ばく、青は飛行機に乗ることによる被ばく、赤は医療による被ばくを表している。１年間で受ける人工・自然放射線量の違いはカードの数で実感できるようにする。全員ゴールしたところで、生活していると被ばくをすることがあること、それは特別な生活をしなければ安全であることを担任から話をする。

人生ゲームを通した疑似体験から、子どもたちの放射線に対する偏見がなくなり、正しい知識を持って判断できる子が育つことを期待する。

図２　すごろく
マスによって受け取るカードの種類が違う